

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

現代日本語における字音接辞の研究—連体詞型字音接頭辞の記述的研究を中心に—

論文審査の要旨

本論文は、現代日本語における字音接辞を研究対象とし、連体詞型字音接頭辞というグループを中心に、その文法的機能と意味的特徴を記述したものである。

字音接辞には、「実生活」の「実」、「理想的」の「的」などがあるが、本論文はまず、字音接辞にどのようなものがあるかを網羅的に調査し、その中でも「当委員会」の「当」、「本研究會」の「本」のように、名詞句に前接する連体詞型と名付けたタイプの接頭辞について、コーパスから採取した多量の実例に基づき、実証的に分析したものである。

現代日本語の文法研究の中で、接辞の研究は十分になされているとはいえず、ごく限られた特徴的な形式のみが取り上げられてきたにとどまっている。特に、「的」のような品詞転換機能を持つ字音接尾辞を中心に、種類の多い接尾辞の研究はいくつかみられるものの、種類の少ない字音接頭辞に関しては、「不」「無」「非」「未」を除いて研究は少なく、体系的・包括的な研究に至ってはほとんど見受けられないことが、先行研究でも大きな課題として指摘されている。そのような状況の中で、本研究は、現代日本語の接辞を網羅的に抽出し、全体を分類・整理して体系化することを試みた、視野の広い、独創的な研究として大きな価値を持つ。

全3部17章306ページの本論と126ページの付録（資料）から成る本論文に対し、論文審査担当者3名は口頭にて詳細な質疑を行った。以下、各部各章の概略を紹介する。

冒頭の序章では、研究の前段階として、字音接辞研究の現状と課題を分析した。

続く第1部第1章では字音接辞を規定し、第2章では字音接辞の抽出と分類を行った。国語辞典7種を悉皆調査し、現代日本語の字音接辞と呼ぶべきものを、字音接頭辞として238形式、字音接尾辞として580形式抽出し、それぞれ8種・4種に分類した。これほどまでに大規模かつ精密な実証的研究は、これまでの研究にはほとんど見られないものとして高く評価できる。第3章では、字音接辞の造語機能に、結合機能・意味添加機能・品詞決定機能・文法化機能の4種があること、本論文の対象である「連体詞型字音接頭辞」は結合機能と意味添加機能のみを持つことを指摘し、連体詞型字音接頭辞の結合機能と意味添加機能の記述が本論文の目的であることを示した。

第2部は、連体詞型字音接頭辞の各論となる。冒頭の第4章では、第2章で抽出した字音接頭辞238形式のうちの連体詞型43形式から、現代日本語で使用されない1形式と、生産性が低く、国語辞典の語例以外の造語例が見られない9形式を分析対象から外し、一方で、

従来は字音接頭辞とは見做されていない2字漢語「当該」を加え、最終的に34形式を研究対象とすること、およびデータとなるコーパス・資料の詳細と分析方法が述べられている。

第5章から第16章では、個々の連体詞型字音接頭辞の造語機能と意味記述がなされる。まず第5章では、直示と前方照応両用法を持つ「本」と「当」を取り上げる。結合機能においては、「本」は「人間活動精神および行為」を表す語と結合しやすく、「当」は「人間活動の主体」を表す語と結合しやすいこと、意味添加機能においては、直示的用法では聞き手との心理的立場に違いがあること、前方照応的用法では「その」との類似性を持つか否かという違いがあることが、実例の分析を通じて指摘されている。

第6章では、前方照応的用法を持つ「同」を取り上げる。「同」の意味添加機能を「全体—全体照応」「全体—部分照応」「部分—全体照応」「部分—部分照応」に4分類して記述した。

第7章では、不定機能を持つ「某」について、類義表現である連体詞「ある」と比較して記述した。「某」は「ある」とは異なり、固有名を持った指示対象について、その固有名の部分在意図的に明かさないという表現であり、「某」は語彙として不定の機能を持っておらず、固有名の部分明かさないことによって間接的に不定の機能を持つことを指摘した。

第8章では、「すべて」を表す「全」と「総」を取り上げる。結合機能において、「全」は「公私」「社会」を表す語と結合しやすい一方、「総」は「量」「経済」を表す語と結合しやすいこと、また意味添加機能については、「全」を4分類、「総」を5分類し、その違いを記述した。

第9章では、「二つの」を表す「両」について、数量表現「二」と比較して記述した。「両」は「二つの」という意味を表すが、指示対象が対になるものであることを示すものであり、もっぱら数量情報の伝達を機能とする「二」とは異なることを指摘した。

第10章では、「それぞれ」を表す「各」と「毎」を取り上げる。結合機能については、「各」は文字数が多い複合名詞と結合しやすく、「毎」よりも生産性が高いこと、意味添加機能においても、もっぱら時間を表す語と結合する「毎」よりも「各」のほうが使用頻度も高く、用法も多様であることを指摘した。

第11章では、「現在」を表す「現」と「今」を取り上げる。「現」のほうが「今」よりも生産性が高く、「今」は主に時間を表す語とのみ結合すること、意味添加機能についても、「現」のほうが多様な用法を持つことを指摘した。

第12章では、「過去」を表す「前」「旧」「昨」「先」の4形式を取り上げる。最も用例出現数の高い「前」は文字数が多い漢語と混種語と結合し、時間、空間に加えて、発展段階のある時点より前を表すという3用法を持つこと、「旧」は「公私」「機関」を表す語と結合しやすいこと、「昨」と「先」は、使用頻度も生産性も低く、「昨」は意味的に「今」と体系性を持つこと、「先」は時間・年代を表す語と結合しやすいことを指摘した。

第13章では、「未来」を表す「翌」「来」「明」「後」を取り上げる。「翌」は時間を表す語としか結合せず、その時間に対して「次の、未来の」時間を表し、照応的であること、「来」は「今」と対になる形式で、「現在の」に対する、「次の」「今回の」に

対する、次の」を表すこと、「明」の後接語は日付を表す語がほとんどで、「「きょうの」に対する、次の」を表すことが指摘されている。「後」は他の字音接頭辞とは異なり、複数の読みを持つため、コーパスからの抽出が難しく、その一般化にはデータの収集方法における課題が大きいことが指摘されている。

第14章では、「不完全」を表す「副」「助」「半」「準」「准」「亜」を取り上げる。「副」は「成員」「作用」を表す語と結合し、中心となるもの、主要となるものではないという意味を表す。「半」は程度性があるもの、区切りにくいものと結合し、その程度が十分でないという意味を表す。「準」は段階性があるもの、区切りやすいものと結合し、「その段階ではない・その段階に次ぐものである」という意味を表す。生産性の低い「准」「亜」「助」は後接語として、「准」は人を表す語、「亜」は、地理・化学を表す語と結合し、やはり「その段階ではない・その段階に次ぐものである」という意味を表す。「助」は、人を表す語と結合し、「中心となるもの・主要となるものを助ける」という意味を表すことが指摘されている。

第15章では、二字字音接頭辞として認定した「当該」を取り上げる。「当該」は先行詞が明示されている場合と明示されていない場合があり、特定指示と不特定指示の両者があること、いずれの場合も話し手の知識状態を想定する程度が低いという特徴があることを指摘した。

第16章では、「その他」として「一」「原」「故」「諸」「正」「続」「他」「汎」の8形式の記述を行う。いずれも用例数が少なく、意味用法が単純なものが多いため、それぞれどのような後接語と結合するのか、どのような意味用法を表すのかを簡潔に記述した。

以上の34形式について、コーパス調査結果に基づき記述・分析した後、最後に第3部終章において、全体が改めて整理されるとともに、今後の課題が述べられている。

本研究は、連体詞型字音接頭辞を網羅的に取り上げるという独創性の高い研究である。方法論的には、書き言葉コーパスから抽出した多量のデータに基づく実証的記述研究であり、具体的なデータに基づいた分析には説得力がある。こうした日本語研究が非母語話者によってなされたことも特筆すべきであり、外国語として日本語を学び、運用する立場からの素朴な疑問が発展し、結実した本研究の成果を、今後どのように日本語教育に応用していくかは大きな課題である。また学位申請者の母語である中国語との対照、本研究で取り上げられた諸形式の歴史的研究、外国語翻訳との関係についても研究の余地がある。

いくつかの課題は残るものの、本論文で取り上げ、記述されている字音接頭辞は、本研究の調査で抽出された接辞のごく一部であることも考え合わせると、本研究はこれから期待される壮大な接辞研究の出発点であると言える。本論文で示された新たな知見と研究成果は、日本語学・言語学・日本語教育のいずれにも資するものであることは明らかであり、連体詞型字音接頭辞を中心に現代日本語の接辞の諸相を詳細に分析し、記述的にまとめ上げた本論文の意義は極めて大きい。以上により、論文審査担当者3名は全員一致で、張明氏の学位請求論文が博士（日本語日本文学）にふさわしいものであると判断した。

論文審査主査

前 田 直 子 教授

鷺 尾 龍 一 教授

木 村 義 之 特別非常勤講師

(慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター教授)